

社会的弱者への支援をテーマとした
サービス・ラーニングの学習効果
— 学校支援ボランティアにおける学生の学びの考察から —
林 加奈子

キーワード：サービス・ラーニング、学習効果、学習到達目標、市民学習

概要

本学基盤教育院の科目である「地域社会参加」の8つのプログラムでは、学生の学習意欲の向上(学習することの意味・必要性を理解すること)、学生の社会問題への意識の高まり、コミュニケーション能力の向上をねらいとしてサービス・ラーニングを取り入れている。それは、サービス・ラーニングがただ知識の習得を目指しているのではなく、「よき市民」としての態度を育成することも意図しているからである。そのため、「地域社会参加」の全プログラムにおいては、学習到達目標として、「学術的学習」とは別に「市民学習」を設定している。

本稿において取り上げる「地域社会参加(子どもと教育)」においても、学習到達目標として上記のふたつを設定している。本稿では、これらの学習到達目標に対する学生の自己評価、最終課題のエッセイ、活動記録、授業態度をもとにその学習効果を考察した。

考察からは、先のサービス・ラーニングを取り入れる3つのねらいについて好意的な評価ができることが見えてきた。また、学生は授業を中心に学びを積み重ねていったのではなく、現場での活動を中心に学びを積み重ねていったことが理解される。自らが現場で五感で感じ、考えているからこそ、授業で習得する「知識」は単なる机上の「知識」にとどまることなく、現場で生きる「知識」として身につけていったのだろう。そして、現場とのかかわりが深くなるなかで、現場の文脈を理解し、その一員として自分には何が求められているのかを学んでいったことも見えてきた。学生は、サービス・ラーニングの科目に特徴的である「よき市民」として必要なことを状況から学びとっていると見える。

しかしながら、今回の考察からは、学生は「学術的学習」における「知識」の習得について、その意味・必要性を理解し始めてはいるものの、自ら文献で調べるなどしてそれらを深められていないことが課題として浮かび上がった。今後は、学生が自ら主体的に学ぶ姿勢、特に「学術的学習」における「知識」を自ら身につけていく姿勢をいかに育成するかを検討する必要性が認められる。

1. はじめに

筆者は、サービス・ラーニング・センターのコーディネーターとして、学内のサービス・ラーニング科目の調整やセンターの運営を行う一方、基盤教育院のサービス・ラーニング科目である「地域社会参加」の全8プログラムのうち、4プログラム（「わたしたちに身近な貧困」「子どもと教育」「国際理解訪問授業」「ジェンダー問題」）を担当している。

サービス・ラーニングの「学習効果」をテーマとした今回のFDにおいて、筆者は「地域社会参加（わたしたちに身近な貧困）」を取り上げ、報告を行った。しかしながら、同授業実践は2013年度 Obirin Today にその詳細を投稿済みであることから¹、今回は「地域社会参加（子どもと教育）」を取り上げ、その学習効果について論じたい。

なお、同プログラムを取り上げる理由は、筆者が担当を始めて2014年度で2年目となり、実践の記録がその他のプログラムに比べ、豊富であると考えためである。

2. 「地域社会参加（子どもと教育）」の授業概要

2-1. 授業の位置づけと授業計画

「地域社会参加（子どもと教育）」（以下、「子どもと教育」）は、子どもたちを取り巻く社会環境や子どもたちの直面する課題を理解すること、また公教育の重要性を理解すると同時にその課題をも見つけ、これらの課題解決のためにわたしたちには何ができるのかを考えることを目標としている。2013年度の履修者数は春学期が8名、秋学期は履修希望者が少なく閉講となったが、2014年度は春学期、秋学期ともに各々5名が履修をしている。

2013年度の活動現場は、大学近隣地域に所在する小学校4校のみであったが、この年の年度末に小学校側より「1年生は現場で活動をするには早いので、受け入れを遠慮したい」という要望があったため、2014年度には市民活動として障がいや貧困を抱える子どもたちの学習支援をしている団体を新たに2つ開拓した。ひとつの授業において公教育と広い意味での社会教育を扱うことを当初は難しいと思ったが、2年目になり、そのメリットの方をより実感している。なぜなら、本授業の現場における活動は、どちらも「集団教育から取り残されてしまう子どもたち」である社会的弱者を対象としていることが共通点にあるからである。

公教育は、周知の通り、集団教育をその主流の教育方法としている。しかし、近年学級崩壊が頻繁に起こるなど、ひとりの教員がクラスの子どもたちを集団としてひとつにまとめることが難しくなっている現状がある。そこで、小学校で活動をする学生は、これら集

団から取り残されてしまう子どもたちの面倒を主に見ることが役割となる。

一方で、当該市民団体における活動においては、学生は発達障がい・学習障がいを抱えた子どもたちや、経済的な貧しさのために学習習慣が身についておらず、塾にも通うことができない子どもたちを対象として学習支援を行っている。このような子どもたちが学校教育においてどのような状況にあるかは想像に容易いだろう。近年、このような子どもたちを対象にした学習支援を行う市民団体が増えている背景には、集団教育から取り残されてしまう子どもたちの増加がある。

上記、小学校あるいは当該市民団体の活動に、授業としては学期中に最低 11 回参加することを義務づけており、どちらの活動においても、学生は基本的には週 1 回、決まった曜日の決まった時間に活動をしている。このように毎週現場で活動するサービス・ラーニングの形は、月 1 回現場で活動するものに比べ、現場の理解、かかわる当事者たちとの新密度に深まりがあり、学生たちの学ぶ姿勢の変化や問題意識の深化には目を見張るものがある。

一方、大学の授業においては、現場で必要となる知識の提供と振り返りを中心に組み立て、教員と学生がともに考える時間を多くとっている。同授業の授業計画は、以下の通りである。

「地域社会参加(子どもと教育)」授業計画

	授業内容
第 1 回目	イントロダクション(授業目標、授業計画、活動や保険の説明など)
第 2 回目	サービス・ラーニングとは
第 3 回目	現代における子どもを取り巻く状況と学校支援ボランティア
第 4 回目	活動先でのオリエンテーション
第 5 回目	学校教育制度とは
第 6 回目	特別支援教育とは(発達障がい、学習障がい、愛着障がい含む)
第 7 回目	活動の振り返り
第 8 回目	不登校とは①
第 9 回目	不登校とは②(フリースクール含む)
第 10 回目	活動の振り返り
第 11 回目	子どもと貧困
第 12 回目	多様な学び — 海外および日本の事例から —
第 13 回目	中間振り返り
第 14 回目	エッセイのテーマ発表
第 15 回目	最終振り返り

2-2. 小学校における活動の概要

小学校において、学生は教育スタッフの一員として、子どもたちの学校生活支援や学習支援、教師の補佐に携わっている。小学校ではこのようなかかわりを「学校支援ボランティア」と呼び、今では多くの学校が取り入れている。背景には、少子高齢化や高度情報化、グローバル化に伴う子どもたちを取り巻く社会環境の変化とそれに影響を受けた公教育における量的・質的な課題がある。近年政府は、地域の教育力を生かして公教育を再生するため、「開かれた学校」を目指し、「学校支援ボランティア」を推進している。本授業で受入先となってきている小学校においても、地域からボランティアを多く受け入れている様子が見受けられる。

小学校において、学生たちは子どもたちから「先生」と呼ばれるため、一人の大人として、変動の中にある子どもたちに接することが要求される。ただし、学生たちはクラスの担任ではないため、集団の指導はしない。学生たちは、担任による集団の指導から取り残されてしまう子どもたちの面倒を主に、担任の学級運営を助けるのである。

学生たちが接する子どもたちのなかには、他の子どもたちと同じようにはできない子、教室を抜け出してしまおう子、過剰に甘えてくる子など多様な子どもたちがいる。週1回の活動のなかで、学生は授業で学んだことを思い出しながらこのような子どもたちに接し、どのように対応すればよいのかということや、そもそも教育とは何なのかということについて考えを巡らせている。

2-3. 市民団体における活動の概要

2014年度より新たに学生の受入団体となってもらっている2つの市民団体は、発達障がい・学習障がいを抱えている子たちやグレーゾーンの子たち、そして経済的な貧しさゆえに塾に通えない子どもたちを対象に学習支援教室を開いている。これら団体は、小学校では受け入れてもらえない本学1年生のために開拓をしたのだが、希望する学生は1年生以外でも活動できるようにお願いをしている。

どちらの団体においても、学生は基本的には個別指導で子どもたちに学習支援を行う。しかし、団体の方針として、教室は学習支援だけをする場ではなく、子どもたちの居場所となることも目指していることから、学生たちは子どもたち一人ひとりと真摯に向き合い、彼らの声に耳を傾け、応答的な対応をすることが求められる。子どもたちは、日常における友だち関係の悩みから恋愛、将来の話まで、ロールモデルである大学生のボランティア先生に話をする中で、自分の将来の道を決める材料を集めていく。

一方、子どもたちのなかには、複雑な家庭環境の下に育った子たちも多い。虐待やネグレクトを受けている可能性のある子もおり、団体の方の話によると、学生と子どもたちと

のささいな会話のなかからこのような状況が知れることもあるため、普段から行政と連携をしているという。このような現場で活動する学生たちは、ただ学習支援をすればよいというわけではなく、団体の活動目的をしっかりと把握し、自分に与えられた役割を果たすことが求められる。

3. 学習効果

3-1. 学習到達目標と学習効果

学習効果を論じる上で、まず同授業が何を学習到達目標として設定しているのかを述べておきたい。「地域社会参加」科目にサービス・ラーニングを取り入れているねらいは、以下の3つにまとめることができる。一つ目は、学生の学習意欲の向上(学習することの意味・必要性を理解すること)、二つ目は、学生の社会問題への意識の高まり、そして三つ目は学生のコミュニケーション能力の向上である²。

サービス・ラーニング科目では、ただ知識の習得を目指すのではなく、「よき市民」としての態度を育成することも意図している。そのため、「地域社会参加」の全プログラムでは、「市民学習」という到達目標を設定し、全プログラムにおいてある程度共通のゴールに向かって授業運営をできるように工夫している³。この「市民学習」は通常の講義形式の授業では設定されていないものであるが、サービス・ラーニングにおいては、「地域における意味のある貢献」を行うことがひとつの要素であることから、「学術的学習」と同様に重要なものとして位置づけられている。「子どもと教育」においても学習到達目標として「学術的学習」と「市民学習」のふたつを設定している。

授業の成績評価は、上記の到達目標を達成できたか否かを授業での学習態度、活動記録、課題発表、最終エッセイから判断し行っている。また、成績評価には原則反映させないが、学期の最後の授業のときには、到達目標を達成できたか否かを学生が自ら振り返る自己評価の時間をとっている。自己評価は、5段階で評価し、なぜその評価にしたのかのコメントも付してもらっている。

以下に一例として、2013年度春学期の履修学生の自己評価を表にまとめる。なお、前述の通り、2013年度の活動地は小学校のみであった。

2013年度履修学生の「学術的学習」についての自己評価(7人分)：

到達目標	平均自己評価	学生のコメント例
① 日本における学校教育の歴史と生きにくさを抱える子どもたちの現状について説明することができる。	3	(自己評価「3」の学生：1年生) 歴史を理解し、現状も小学校での活動をするなかで理解を深めることができた。もっと活動をして、自分のことばで説明できるようになりたかった。
② 教育問題を自分ごととして捉え、公教育の重要性と日本の公教育の課題について指摘することができる。	3.2	(自己評価「5」の学生：1年生) 実際に小学校で活動をして、「親でも先生でもない立場」からの支援が今必要なのだと痛感した。同時に、家庭環境、家庭教育の質が低下しているということを学んで、公教育の重要性を認識した。 (自己評価「3」の学生：2年生) 授業のなかで自らの教育体験を振り返ったり、今ある問題を見つめなおすことによって、教育問題を自分ごととして捉えることができた。しかし、公教育の重要性や課題を指摘するまでにはまだ結びつけられていない。
③ 課題解決のための自分なりの意見を組み立てることができる。	3.7	(自己評価「5」の学生：4年生) 何回も行ったグループワークのなかで、積極的に自分の考えを発信できた。また、他の人の意見を踏まえて自分はどう思うのかと考えながら発信することができた。 (自己評価「3」の学生：2年生) この面ではまだまだがんばらないといけないと思うが、4月の頃と比べて少しだけできるようになったかなと思う。

2013年度履修学生の「市民学習」についての自己評価(7人分)：

到達目標	平均自己評価	学生のコメント例
① 市民としての権利・義務 社会の仕組みとその裏づけとなる法の働きを知り、理解することができる。	2.7	(自己評価「2」の学生：2年生) 社会の仕組みについては、「教育」という視点を通し考え、理解することができた。また「教育」の問題は「教育」を変えればよいというわけではなく、社会の価値観なども変えていく必要があることを知った。しかし、その裏づけになる法の働きは理解できていない。社会の仕組みや法について考えていく必要がある。
② 社会のなかの多様性 「弱い立場」にある人々は、自らの責任で弱い立場になってしまったのではなく、実は持っている能力を発揮する機会を奪われた「弱められた人たち」であることを理解する。	4	(自己評価「5」の学生：1年生) 身体の障がいにしても、知識や能力の劣った人だとしても、他で優れた能力は何かしら持っているはずなのに、それを発揮できる機会を「社会」「集団」「世間」などに奪われて弱い立場になってしまったということを深く理解することができた。
③ よき支援者 他者の意見を尊重する姿勢を身につける。その上で、他者の意見を傾聴することができるようになる。		N/A

<p>① 市民社会の果たす役割 地域の課題解決に取り組むそれぞれのアクター、特に市民社会の意義・役割、問題点や限界を知る。</p>	<p>3.4</p>	<p>(自己評価「3」の学生：1年生) 地域の問題解決のために、それぞれの立場からできること、やらなくてはならないことを学んだと同時に、「やればよくなりそう、やりたい」≠「できる活動」だとも感じた。ボランティアという立場は、所詮ボランティアでしかないけど、そのなかでできる精一杯のことをやりたいと思った。 (自己評価「2」の学生：2年生) 実際に活動をして、学校でのボランティアの意義については考えたが、ここまで深く考えてはいなかったもので、そういったことをもっと意識して活動するべきだった。</p>
<p>② リーダーシップ 現場での活動において「指示待ち」ではなく、自ら進んで行動することができる。</p>	<p>3.8</p>	<p>(自己評価「4」の学生：4年生) 最初は何をすればよいか分からなかったが、徐々に役割を理解して、先読みして行動できた。 (自己評価「3」の学生：2年生) 自ら進んで指示をもらいに行ったり、行動することを意識してはいたが、「指示待ち」になってしまう場面もあった。</p>
<p>③ 責任ある市民 地域社会には、さまざまな意見や立場、「正しさ」の主張があることを知り、それらの主張の根拠や正しさを理解することができる。</p>	<p>4</p>	<p>(自己評価「3」の学生：2年生) ボランティアとして教育現場に携わって、先生の立場、生徒の立場、そして第三者の立場で学校を見ることができたので、先生や生徒の苦勞が分かった。客観的にみることで、学校、学級のいいところ、気をつけなければいけないところなど自分なりに理解することができた。</p>

最終課題のエッセイは4,000字以上とし、テーマは学生が自由に設定している。2013年度の履修学生8名は、以下のようなテーマでエッセイを執筆した。それぞれのテーマの問題意識は小学校における活動体験から出発しており、それについて文献で調べたり、授業で学んだことをもとにしなが、エッセイをまとめている。

- 「心が育つ ～愛着障がいと子どもの心理～」
- 「家庭環境が子どもに及ぼす影響」
- 「教育を感じる」
- 「小学校ボランティアを通して ～『叱る』というコミュニケーション～」
- 「小学校ボランティアに参加して ～変わりつつある小学校～」
- 「置き去りにされる子どもをなくすために」
- 「学校支援ボランティアの意義」
- 「特別支援教育と発達障がい」

3-2. 考察

学生による学習到達目標の自己評価からは、「学術的学習」においても「市民学習」においても、現場における活動の体験をもとに学生が振り返りをし、評価をしていることが分

かる。ここからは、学生が授業を中心に学びを積み重ねていったのではなく、現場での活動を中心に学びを積み重ねていったことが理解される。自らが現場で五感で感じ、考えているからこそ、授業で習得する「知識」は単なる机上の「知識」にとどまることなく、現場で生きる「知識」として身につけていっているのだろう。

ただし、「学術的学習」の自己評価、特に①および②の「知識」を身につけるといふ学びについては際立って高いというわけではない。このような学びが必要だと感じ始めたものの、そこまで深めることができていない。これについては、同じく「知識」を身につける要素を持っている「市民学習」の①についても当てはまる。

一方、いわゆる「態度」を身につけるといふ学びについては、学生は比較的高い自己評価をつけていることが分かる。授業では、毎回活動後に活動記録を記し、毎週提出することを義務づけており、その記録に「自らの動き」について記す欄を設けている。そのため、学生は常に自らが現場でどう動けばよいのかを意識せざるを得なかったということがあるのだが、それと同時に、現場とのかかわりが深くなるなかで、現場の文脈を理解し、その一員として自分には何が求められているのかを状況から学んでいったと推測される。

では、「地域社会参加」にサービス・ラーニングを取り入れる3つのねらいについてはどうだろうか。まず、学生の学習意欲の向上であるが、これは上記で述べたように、深まりが足りないという課題はあるものの、現場で活動をする上で必要な「知識」を自らが身につけることの必要性を学生が理解し始めていることから、好意的に評価できるだろう。なお、予断であるが、この学習意欲の向上は、学生と現場とのかかわりが深くなるにつれ、大学における授業態度が良くなっていくことにも現れていると感じる。学期初めは、サービス・ラーニングが何であるかも分からず、現場で活動することが必須であるということだけをただ理解し、言われたことをこなしている学生が多いのだが、毎週小学校に通い、現場での活動を繰り返し、また授業の中で振り返る機会を多くもつことにより、学期の後半から学生の態度、そして活動記録の内容が向上していくと感じている。

二つ目の学生の社会問題への意識の高まりについては、もともと「地域社会参加」の科目を履修する学生は、傾向として社会問題に関心がある学生が多いということはあるのだが、それを差し引いても、自らが社会の一端にかかわり、問題解決のために動いているからこそ、意識が高まるのだろうと推測される。最終課題であるエッセイからは、学期初めは「子どもが好きだから子どもとかかわりたい」という意識であった学生が、取り残されてしまう子どもたちがなぜ生まれるのかについて、家庭環境、社会状況、教育制度のあり方や現状から考察しているようすが伺える。また、授業が終わっても活動を継続する学生が数名いたことは特筆しておきたい。大学コミュニティから出て、積極的に社会と関わる

うという姿勢が伝わってくる。

最後に、学生のコミュニケーション能力の向上については、活動記録から把握することができる。活動記録には毎回自らの動きの反省点と次回の目標を記し、また自らコミュニケーションをとり、関係を築いている人の数が増えていっていることを記す学生が多い。ここからは、積極的に他者とコミュニケーションをとろうとしている様子が見とれる。小学校現場においては、学生は自らの活動の直接の対象者である「子どもたち」だけではなく、現場にいる先生、他のボランティアとも同時に関わらねばならない。「子どもたち」のために、それ以外の他者とかわるということを学生は奮闘しながら実践している。

また、このコミュニケーションについては、大学の授業における学生の様子を見ても好意的に評価できる。授業では、振り返りの時間を多く設けているが、当初はただ周りの学生の意見を聞くことで精一杯だった学生が、徐々に自分の意見を自分のことばで話すことができるようになってきている様子や、他者の意見を尊重しながら聴くことができるようになってきている様子を見受けられる。

4. おわりに

本稿では、サービス・ラーニング科目である「地域社会参加(子どもと教育)」を取り上げ、学生の到達目標に対する自己評価、最終課題のエッセイ、活動記録、授業態度をもとに学習効果を考察した。ここからは、サービス・ラーニングを取り入れるねらいである学生の学習意欲の向上、学生の社会問題への意識の高まり、コミュニケーション能力の向上について好意的な評価をすることができることが分かった。また、サービス・ラーニングの科目に特徴的である「よき市民」として必要なことを学生が状況から学びとっていることも知る事ができた。

しかしながら、「学術的学習」における「知識」の習得については、学生はその意味・必要性を理解し始めてはいるものの、自ら文献を調べるなどしては深められていないことが課題として見えてきた。1学期に、15回の授業への出席のほか、現場での活動を必須としているサービス・ラーニングの科目は学生にとってはハードルが高い。だが、今後は、学生が自ら主体的に学ぶ姿勢、特に「学術的学習」における「知識」を自ら身につけていく姿勢をいかに育成するかを検討する必要性が認められる。

注

- 1 「学而事人を目指したサービス・ラーニングにおける授業づくりへの提言—学生の学びと受入団体の意見をもとに」というタイトルの下、受入団体の方の意見を取り入れた原稿を寄せている。
- 2 2012年6月に行った学内FD発表資料「サービス・ラーニングの既存科目への導入について」より。
- 3 本学で、2012年度にサービス・ラーニングを正式に授業に取り入れる際、アメリカの実践を参考に、サービス・ラーニング・センターにて考案した。